



一橋大学機関リポジトリ
HERMES-IR

Title	「思出の記」とデイヴィッド・コパーフィールド
Author(s)	海老池, 俊治
Citation	一橋論叢, 39(3): 323-330
Issue Date	1958-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/3840
Right	

「思出の記」と「デイヴィッド」 コパフィールド

海老池俊治

小説を書き出すまでの蘆花徳富健次郎の経歴は、大體次のようである。

明治十一年、十歳の少年であった健次郎は、兄猪一郎に従って同志社に入學し、十三年に退學したが、十九年に再入學、二十年退學、二十二年上京して、兄を助け、二十三年以後、「國民新聞」の創刊とともに入社して、翻譯を受け持った。

少くとも青年時代までの蘆花は、兄蘇峰の指導の下に、當時の政治的雰囲気呼吸し、英語の教養を身につけていたのである。尤も、この場合、「英語の教養」とは必ずしも嚴重な意味で「英文學の教養」ではない。しかし、蘆花が英文學の作品を読んで身につけ、それをいわゆる自由民権思想的な政治的興味と重ね合わせていたことはたしかであろう。

では、初期の文人蘆花は實際英文學からどれほどの影響を受けたであろうか。

有名な處女作「不如歸」(明治三十一—二年「國民新聞」に連載)が直接英文學のどの作品からどんな影響を受けて作られたか、と問うことは、見當外れであろう。大山大將家の家庭悲劇

からヒントをえて書かれたといわれるこの未熟な小説は、種が見えずいている。執筆の動機が餘りに單純である。

勿論、大山家云々の事實がそのまま物語られているわけではない。川島浪子の墓が雜司谷にないことは、貫一お宮が熱海の海岸を散歩しなかつたことに等しい。ただ、作者は即物的な興味を完全に假作の世界に轉位せずに、事實としての人間の不幸に同情しすぎているから、彼がどんな文學的教養をそなえていたにもせよ、それが十分具現されているとは思われないのである。

ところで、「不如歸」を書いてから一二年後に、蘆花は彼なりに最も小説らしい小説、即ち、假作として首尾一貫した、今日でも讀むに耐える小説を書いた。

それは、明治三十三年に「國民新聞」に掲載された「思出の記」であるが、明かに作者の實生活を材料にしている——いいかえれば、明治の日本という事實をふまえている點で、「不如歸」同様即物的である。そして、他方、明瞭に英文學のある作品の影響の下に書かれたのである。

この小説は主人公菊池慎太郎の自敘傳という形になっている。彼は九州中部の農村(小さい町)のかなりな大家に生れたが、少年時代に零落し、父を失い、母とともに、母の姉の夫に引取られる。そして、伯父に愛された餘り、從姉と結婚してその家を継ぐことをすめられて、それを斷り、伯父の家にならずらくなる。出奔し、いろいろ辛苦をなめる。神戸で關西學院に入學するが、正義感から問題を起し、中退、東上、舊師の助力

をえて、文科大學に入る。英文學を修めて、卒業、文筆家として一家をなす。その間に、氣丈な彼の母や、馬子から石炭山の持主になる新五という昔なじみの事業家などが、彼の精神的な支えになって、自立を助ける。

主人公が幼友達の妹松村敏子に戀して、結婚し、幸福な家庭を造るロマンスの経緯が、以上の経歴かららんでゐる。

右にいったように、この小説には作者の半生の経歴がかなりはっきり組み込まれてゐる。

「蘆花傳」の著者前田河氏は、

この小説のモデル考證には各種各説入り亂れてゐるが、それらも全體の筋が、やや健次郎の自傳に近い程度での眞實性を帯びてゐると同程度の、實在性しか帯びてゐないものと思惟すべきであらう。(二)

といい、數人の登場人物を實在の人物に擬してゐる。

素材の問題中、先ず目につき、また、殊に興味深いものは、物語の最初に描かれてゐる主人公の生地であらう。その土地、即ち、妻籠は作者蘆花の妻愛子の故郷をモデルにしたものらしいが、蘆花はこの作品の執筆當時妻の故郷を見たことがなく、初めてそこへ行ったのは、大正二年であつたといふことである。(三)従つて、この場合、事實の寫生がどれだけ正確かは問題にならない。しかし、自分の半身である妻の故郷を主人公の生地に指定した作者の心理には、その場所の選擇がかなり重要な意味を持つてゐたに相違ない。物語の虚構性ははっきり事實に支えられてゐるのである。

とにかく、主人公の生地妻籠の風物を描く作者の筆は、きわめて暢達であり、鮮明な映像を浮び上らせる。

その點について、蘆花の知人齋藤弔花が語つてゐる次のような挿話は、はなはだ示唆的だといわなければならぬ。ある死刑囚が、懺悔録を書いたが、飛騨高山在の彼の故郷を語つた、取出で云ふ程でも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の清いのと、稻の美しさである、云云

と始まる文章が、「思出の記」一の卷(一)の文章を、二頁ほど殆んどそのまま引き寫したものであつたといふのである。(五)

弔花がその話を蘆花にすると、彼は笑い出して、「どこまでも癖の出るのは人間の本能だ。知らず／＼に泥棒の本性が出たのだ。併しよくまあそんなに暗記してゐたものだ。本人すら忘れてゐるのに」といったといふ。ところで、蘆花が、その話を聞いたとき、笑つてばかりいらずに、もし眞面目に反省してゐたとしたら、或いは、彼は愕然としたかも知れない。

この逸話は「思出の記」發端の遅しい描寫力と即物性とを證明する名文に相違ない。しかし、翻つて考えてみれば、九州中部の絛景がそのまま本州中部の絛景として通用すると人に思わせたことは、それが暢達、鮮明であるにも拘らず、或いはむしろ、そのために、非個性的で平板であることを裏書きするともいえるであらう。

そこに、蘆花の描寫の本質が暗示されてゐるように思われる。

前田河氏のいま一つの蘆花研究書「蘆花の藝術」に、

主人公菊池慎太郎を通じて見た明治精神は、第一に人の精神の自由を尊重する氣魄に窺はれる。

とあり、彼の知識慾、基督教への歸依、女性の獨立の尊重、樂天主義などが指摘されている。

そのような精神態度はたしかに「明治精神」といわれるものの典型である。が、問題は、その「典型」がどれだけ個性のうち具現されているか——近代的な文學の最も中心的な主題である個性と環境の相克が、どれだけ深く切實に體驗され、表現されているかであろう。

ここに表現されたものは、個或いは自己でなく、それらしい擬装の下に、ある意味で習俗的な時代精神ないし生活感情が授け出されているにすぎないように思われる。

「思出の記」三の卷、(十一)に、少年時代の主人公が、駒井哲太郎という人物にひきいられる學校育英學舎で、讀み耽った小説の名が、擧げてある。

「西洋血潮小嵐」、「自由の凱歌」などそれらの作品は、今日殆んど顧みられないが、ともにデューマの翻譯であり、明治十五年に出版された。當時、主に政治的興味から讀まれたものらしい。ところで、そのような讀書は明かに作者の實生活の反映であって、一九五六年八月號「文學」(岩波)に、勝本清一郎氏の記すところによれば、明治十六、十八、二十年の蘆花の手抄本五冊(勝本氏の所藏本)には、東海散士の「佳人之奇遇」や矢野龍溪の「經國美談」からの「抄寫が多い」ということである。

以上のうち、例えば、「佳人之奇遇」が直接「思出の記」のどこにどう粉本として使われているかは、問題でない。

東海散士、日費、府ノ獨立、閣ニ登リ仰テ自由ノ破鐘（歐米大事アル毎ニ鐘ヲ撞ク鐘ニ裂ク後人呼テ自由ノ破鐘ト云フ）ヲ觀俯テ獨立ノ遺文ヲ讀ミ當時米人ノ義旗ヲ舉テ英王ノ虐政ヲ除キ卒ニ能ク獨立自由ノ民タルノ高風ヲ追懷シ俯仰感慨ニ堪ヘス

というような卷一の冒頭を見ただけでも、この作品が「思出の記」と大分違うことが——「思出の記」のほうをはるかに實生活に即した物語であること——近代的な意味での小説になっ
ていることが、分る。しかし、思想の點では、兩者はさほど離れていないのである。

「佳人之奇遇」を「思出の記」と並べたとき、そこにもう一つの作品をおいて、それらを結びつけたくなるのは、思い過しであろうか。その作品とは、本間氏が「明治文學史」上第一編第七章「政治小説」の第三節(四)に、「純粹の政治小説とは稍々趣を異にするが」と斷つて、「佳人之奇遇」と共に論じている菊亭香水の「世路日記」である。

明治十七年に出版されたこの物語は、ある田舎の小學校教師久松菊雄の立志談であり、結局彼が某政黨に加わって、自由改進を唱えることに、彼の教師時代の教え子に對する戀をからませたものである。

「世路日記」が「思出の記」に連想されるわけは、先ず、その思想、即ち、「菊池慎太郎を通じて見た明治精神」のうち、「基督教への歸依」はとにかく、「知識慾、女性の獨立の尊重、

樂天主義」が、全く相通じるからである。が、そればかりでなく、また、次のような不思議な一致が見出されるのである。

菊亭香水が描いた主人公が久松菊雄であり、蘆花の主人公が菊池慎太郎であることは、偶然の一致かも知れない。しかし、「世路日記」の作者ははじめ教員をしていたというところであり、主人公は彼の半身であったに相違なく、彼はこの未熟な小説に主體的な生命を盛ろうとしたものであることは疑いない。そして、一方、「思出の記」の主人公を啓發した育英學舎の師範井哲太郎は、主人公が東京で苦學しているときに外國から歸朝して、佐藤鐵嶺という名で「平民新聞」の主筆になった(彼はいわゆる兵隊養子であり、一時駒井姓を名乗っていたのである)とあるのに對して、「世路日記」の作者菊亭香水は本名を佐藤藏太郎というのである。

佐藤哲太郎と佐藤藏太郎という名の類似、前者と久松菊雄の經歷の類似は、ただの暗合であろうか。とにかく、「世路日記」は出版とともに大いに流行して、版を重ねたのであるから、「佳人之奇遇」を耽讀した蘆花は、この本をも讀んでいたに相違ない。

以上の論旨をいま一步進めてみる。

上に引用した「佳人之奇遇」の冒頭を次のような「世路日記」の冒頭と比べたととき――

曉鶉初メテ啼テ太陽未タ昇ラズ四山朦朧ヲ帯ヒテ金星猶ホ西天ニアリ堂々タル大層ノ中東窓少カニ白フシテ四隅未ダ明カナラス満堂寂寥更ニ人語ナク只タ時器ノ一隅ニ分秒ヲ刻スルノ音

ノミ凄然タリ

當然、明治初年の劃期的な翻譯小説「花柳春話」が思い合はされる。それは、

爰ニ説キ起ス話柄ハ市井ヲ距ルコト凡ソ四里許ニシテ一ツノ荒原アリ綠草繁茂、怪石突兀、滿眼荒涼トシテ四顧人聲ナク恰モ砂漠ノ中行クカカ如ク唯悲風ノ颯々ト草葉ニ戰グヲ聞クノミと始まるのである。

リットン (E. G. E. Bulwer-Lytton, 1803—73) の「アーネスト・マルトラヴァース」とその續編「アリス」(Ernest Maltravers, 1837; Alice, 38)の抄譯であるこの小説が、明治十一年に出版され、政治的な興味のためもあるが、時流に投じ、當時の日本人に新時代(ヨーロッパ風)の人情を理解させる上に、大きな効果をあげたことを思えば、「思出の記」の思想的起源をこの作品まで遡らせても、不合理とはいえないであろう。

リットンは今日殆んど眞面目に取り扱われない英國十九世紀の小説家であるが、蘆花が直接彼からどれだけ文學的な養分を吸収したかは別にして、前者の文學的教養のなかには、間接にはあつても、時事的流行作家であつた後者の文學がかなりの部分を占めていたに相違ない。

さて、リットン(文學的通俗性)との關係はとにかく、「思出の記」は、まぎれもなく、リットンと同時代の代表的な英國小説家ディッケンズ(Charles Dickens, 1812—70)の作品から、影響を受けて書かれたものである。そして、その事情は、多少ディッケンズを心得ているものがこの小説を讀めば、すぐ感じ

取れるほど明かであるばかりでなく、作者蘆花自身がはっきりそれを書き残している。

蘆花は大正十四—昭和三年に、妻と共に著者で、自分の率直な人生記録を小説「富士」として出版したが、その第二巻第二十章一に、「思出の記」の執筆を語って、それがディッケンズの「デイヴィッド・コパフィールド」(David Copperfield, 1849—50)から影響を受けたことを告白しているのである。

英吉利風の行儀のよいロウの書きぶりがヨリ好い粉本であつた。

と、いい、

端的に自己を書くとするは、書くに忍びぬ事だらけである。それを差引けば、いくらも書く事はない。そこで「思出の記」に於て、熊次は自己のあるものを遊離させ、兄のあるものを取り入れ、人物事物さまざまの思出の上澄みを軽くすくひ上げて、気軽に面白い讀物を作つた。

と、いっている。

ヴィクトリア朝の習俗から終生抜け出すことができなかったディッケンズを、「行儀のよい」という批評は當っていなくはない。しかし、半自叙傳「デイヴィッド・コパフィールド」のなかで、自己をありのままに語らなかつたディッケンズは、ただ「思出の記」のような、或いはまた、リットンリットンの諸作のような「気軽に面白い讀物」をししか書かなかつたわけではない。なぜなら、ディッケンズには強烈な個性があり、その環境との相剋が痛ましいほど激しいからである。

とにかく、「思出の記」がどんなに「デイヴィッド・コパフィールド」から強い影響を受けているかを示すために、前者の(一)の巻(二)の一節(先に言及した風物描寫につづく主人公の生家の描寫)と、後者の第二章の一節(この章には「Objective」という表題がついており、主人公が身のまわりを始めて見聞した思出が語られている)とを、比べてみたい——

年月と云ふいたづら者が、覺へて居たいと思ふ事は容赦もなく忘れさして、何でも無い事ばかり思ひ出させる。家の柱が無暗くまやみに大きくて部屋が薄暗かつた事や、破風の所に鳩の像を高彫たかばうにしてあつた事や、裏の方が馬鹿に廣くて倉庫が幾箇もあつた事や、其一の倉庫には何時も米俵が山程積むであつた事や、馬鹿勤と云つて其處に二三日此處に四五日と町の豪家を食廻つて少し其家の米俵が減れば直ぐ他の家に移るのが癖であつたが僕の家ばかりは一ヶ月乃至二ヶ月逗留の榮を辱ふた事や、一の倉庫には仁王様の風呂桶の様なのが一杯入つて居て、其倉の屋根から恐ろしく大きな榎樹がぬつと頭を出して、夏の頃になると蟬の聲が死まがら雨の降る様であつた事や、其れから家には若い男女が二三十人も居て盆の月夜に裏庭で白手拭を冠つて躍つた事や、此様な事はきれいに覺へて居るが、さあ家の全圖をひけと云はれると一切分からぬ。

Looking back, as I was saying, into the blank of my infancy, the first object I can remember as standing out by themselves from a confusion of things, are my mother and Peggoty. What else do I remember? Let me

see.

There comes out of the cloud, our house—not new to me, but quite familiar, in its earliest remembrance. On the ground-floor is Peggoty's kitchen, opening into a back yard, with a pigeon-house on a pole in the centre, without any pigeons in it; a great dog-kennel in a corner, without any dog; and a quantity of fowls that look terribly tall to me, walking about in a menacing and ferocious manner. There is one cock who gets upon a post to crow, and seems to take particular notice of me as I look at him through the kitchen window, who makes me shiver, he is so fierce. Of the geese outside the side-gate who come waddling after me with their long necks stretched out when I go that way, I dream at night; as a man environed by wild beasts might dream of lions.

この類似が(相違でなく)「思出の記」の描寫とそれを盗んだ死刑囚の手記の類似に等しい、などといつては、禮を失したいかたであろう。しかし、本質的に、それら二つの間にどれだけの差があるであろうか。ディッケンズの觀察眼に生々と動いてゐる個性、或いは、幻想的な、ある意味では偏執的な、特異な映像を矯正して、「行儀よく」したら、そっくりそのまま蘆花の描寫にならないであろうか。

「思出の記」と「デイヴィッド・コバフィールド」との描寫でなく、その構成の相違を、即ち、事實の斷片を假作の世界に

組み入れて——非現實的な第二の現實を創造する骨組の相違をあげてみれば、上の疑問に對する幾分の解答が示唆されはしまいかと思われる。

例えば、デイヴィッドの母はおろかな女であり、夫の死後事實上幼兒デイヴィッドをすて、再婚し、彼の不幸の原因になる。彼女はデイヴィッドが成長(自己發展)をとげる種にはなるが、直接それに關與しない。(注意すべきことに、その経緯はディッケンズの實生活上の事實ではなかつた。)一方、慎太郎の母は、先にいつたように、彼の成長(立身出世)のモラル・サポートである。少くとも、その最大の一つである。彼女は氣丈で、物分りがよく、息子が苦勞している間中、泣言一ついわずに、一家(とは、實は、彼女と息子と二人が構成している)であつて、家名という一種の幽靈である)を守る。幾何かの金を貯金しさえする。彼が敏子と結婚したいといつたとき、早速電報で東京の親類にその周旋を頼んでくるほど氣が利いている。「時として母を懐はぬことは無いが、事ある毎にいよ／＼母のありがたさを感じる」(十の卷(九))という慎太郎の感慨を讀むと、「お目出とう」といふ氣がすると同時に、「いい氣なもんだ」といふ氣がすることもたしかである。

次に、デイヴィッドはドーラ・スペンロウ(Dora Spellow)という非實際的な、ただむやみに可愛い少女に戀して、結婚し、忽ち幻滅の悲哀を感じる。そこまで、眞實感を以て、主人公の内心を辿つて來た作者ディッケンズは、そこで遂に話の續けようがなくなり、突然、ドーラを殺してしまうのである。そのよ

うなプロットの處置は行き當りばつたりだといふ非難を免れないであろう。しかし、ドーラの性格と彼女と主人公との關係の設定は、いかにも緊迫している。見事な人間造形である。一方、慎太郎が戀する敏子は、聰明で、しとやかで、彼の事業をよく理解し、慎太郎の母を始め親類一同に祝福されて、彼と結婚したのちは、その理想的な妻になる。讀者はいよいよ「いゝ氣なもんだ」という氣にならないわけにいかない。その筋の運びは、ディッケンズのように投げやりでないにもせよ、「氣輕」すぎる。果して眞に「面白い」かどうか、保證の限りでない。

「思出の記」の主人公が敏子に久しぶりで再會して、松源という料亭で一緒に食事をしたとき、

其後ツッケンスの「カツバアフィールド」を讀んで、主人公がドラを戀ふる條下に「ドラと珈琲で生きて居る」と云ふ句を讀むで、失笑したが、僕自身も松源の一席は確かに「お敏君と茶」で済ましたのである。(八の卷(十))

とある。しかし、松村敏とドーラ・スペンロウは全く違つた女である。性格が違うばかりでなく、主人公(自我ないし個性)に對する位置が違うのである。

「デイヴィッド・コバフィールド」第二十八章の始めに「I lived principally on Dora and coffee」という言葉があるが、デイヴィッドがこうして戀の幻につかれて居る間に、悲劇は深刻な破局を準備している。三章先の第三十一章で、デイヴィッドの清純な幼年時代の戀人(?) エミリー・ペゴティ(Emily Peggotty)が、彼の友人ステイヤフォース(Steer-

forth)と駈落ちして、彼の樂園の夢が残酷にも破れてしまふ。次で、デイヴィッドはドーラと結婚して、彼女が一家の主婦として全然無資格であることを發見する。

「デイヴィッド・コバフィールド」はまぎれもなくヴィクトリア朝的である。妥協のない個性の内的發展を用捨なくあとづけたリアリティックな小説だとはいえない。しかし、斷片的にはあつても、人間性とその環境との嚴肅な眞實をひらいてみせる。とすれば、この粉本から、蘆花が右のような話のうまさすぎる物語を造り上げた原因は、一體どこにあつたのであろうか。

自由民權の立身出世主義の明治精神は日本のおかれたいわゆる後進的な歴史的條件から生じたものに相違なく、また、ヴィクトリア朝の人道主義は十九世紀の「先進國」英國の社會史的條件から生じたものに相違ない。

しかし、ここでいま最も重大なことは、蘆花が、「思出の記」を書いた當時、自由民權的精神にさほど大きな矛盾を感じていなかったことである。ところが、いうまでもなく、矛盾はその發見に努力する人、例えば、ディッケンズなどには、いつの世にも存在するものである。

「デイヴィッド・コバフィールド」と「思出の記」の差は、根本的に、兩者の作者の資質から生じたものであろう。もしその「資質」という言葉を「天才」という言葉におきかえれば、分つたやうな分らぬやうな問題の處理法になり、それを解決したことにはならないであらう。が、ただはっきりしていること

は、「デイヴィッド・コバフィールド」の作者ディッケンズは、大衆作家ではあったが、偉大な藝術家であり、「思出の記」の作者蘆花は、話術が巧みな叙述家（それは明治文學史上すこぶる重大な事實だとはしても）ではあったが、眞の近代的な藝術家ではなかった。

英文學から眞に近代的な文學の養分が吸収されたのは、蘆花でなく、獨歩と、なお一そう明瞭に、漱石においてであった。立身出世主義を厳しく批判し、個性の近代的破壊を痛ましく意識した（その原因がなんであつたにもせよ）作家においてであつた。そして、その場合、英文學の代表的な作家はディッケンズではなかった。漱石は不思議なほどディッケンズを軽く取扱つてゐる。

いや、不思議ではない。わが國でディッケンズが眞に第一流の文學者と思はれるようになったのは、極端にいえば、ここ數年來のことであろう。蘆花が「デイヴィッド・コバフィールド」を「たゞ行儀のよい書きぶり」だと感じたのは、右にいったように、根本的に彼の資質（天才）のせいに相違ないが、ディッケンズの藝術が大そう理解し難いこともたしかである。

- (一) 前田河廣一郎「蘆花傳」42「不如歸」の由來」參照
- (二) 同書45「毀譽」
- (三) 限府
- (四) 「蘆花傳」45參照
- (五) 齊藤弔花「蘆花と作品」四「明治中期を描く」「思出の記」「思出の記」の追想」

- (六) 「蘆花の藝術」七「思出の記」「慎太郎と明治精神」
- (七) 柳田泉「明治初期の翻譯文學」「明治初期の翻譯文學」六參照

(八) 同號「文學」は蘆花特集。

(九) 勝本清一郎「蘆花とキリスト教」(「文學」)

(一〇) 主人公の政治活動を述べる部分は、明治二十八年出版の「訂正増補」版にくわしく説かれてゐるのである。初版では、主人公の戀物語が主な筋になつてゐる。

(一一) たゞし、佐藤哲太郎のモデルは馬場辰猪であるといふ。「蘆花の藝術」七「思出の記」「諸人物の類型について」參照。なお、明治二十八年版「世路日記」の表紙には「佐藤藏太郎著」と記されてゐる。

(一二) 勝本氏は「思出の記」のあかるい健康なバックボーンといわれているものは、まさにその郷土的倫理にほかならぬ」といふ。勝本清一郎「蘆花と士族的倫理」(「明治大正文學研究」第二十三號、昭和三十二年十月發行、特集「徳富蘆花の研究」、東京堂)。

(一三) "His was an ambitious, restless talent, but that of the popularizer rather than that of the creator."—Walter Allen: *The English Novel, a Short Critical History* (1954), 4, 1.

(一四) トルストイに比べて。

(一橋大學教授)